

## 那珂川市歴史を学ぶ会の活動から『中原の風土記』を著して

変わりゆく景色の中に時を超えて語り継がれる物語があります。昭和44年(1969)、世帯数43戸の寒村に突如として新幹線車両基地計画が降りそそぎます。生活の基盤であり、先祖伝来の農地を手放すことは耐えがたく、絶対反対の請願を続けました、しかし国家的事業の意義は重く、基地とともに栄える道を選びました。

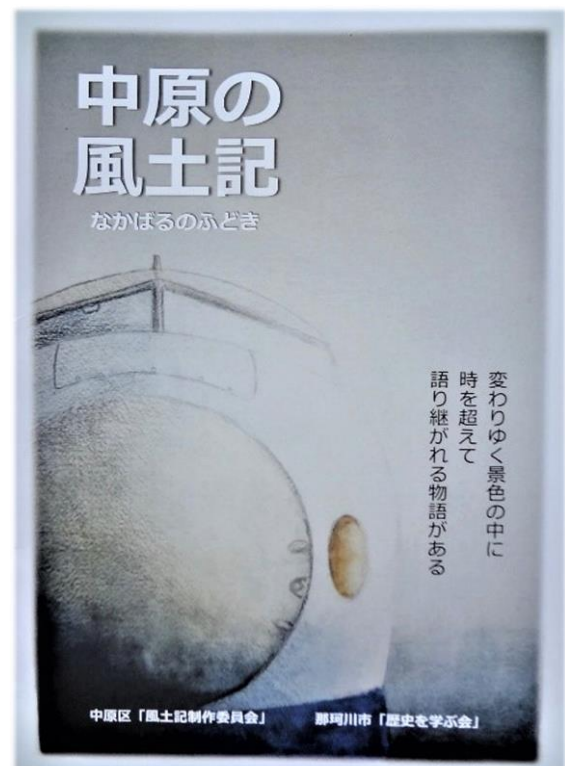
西日本最大の車両基地の整備(昭和50年)、博多南線の開業(平成2年)などがあいまって、令和2年には、世帯数2,026戸、人口4,822人の都市へと変貌しました。わずかな歳月の間に変わり果てた中原、しかし、ここには驚くべき先人たちの軌跡が眠っていたのです。

ということで、3年の歳月を費やして刊行したのが、那珂川市中原区の『中原の風土記』です。そもそも、中原区の古老から「俺たちがいなくなったら中原の歴史と文化が風化してしまう、なんとかならんもんやろか」という相談を受け、歴史を学ぶ会の仲間と共にルネサンス(地域の歴史の再生)に取り組んだのです。

歴史を著すときに大切なことは、必ずしも専門的な知識や情報ではなく、人間らしいあたりまえの感覚や感情なのです。事実を広く収集し、当事者の肉声をできるだけ集め、それをきちんと整理し、固定概念にとらわれることなく、自分の頭で考え「むずかしいことをやさしく」書き著す。それ以外にふるさとの歴史と文化を著すことはできない、と信じています。

まもなく団塊の世代(1947~1949年までの出生数810万人)が後期高齢者の仲間入りをします。この大きな塊のこれからの生き方が「この国のかたち」を変えていくと思います。考え方がネガティブであれば、この国や若い世代の負担が増し、暗い世相を形成していくでしょう。しかし生き方がポジティブであれば、この国の文化を継承することができます。

先人たちによって生み出され、継承されてきたふるさとの歴史と文化を次の世代に語り継ぐ、このことが今を生きる私たちのシニアルネサンス(高齢者の知識と経験を社会に活かす)なのです。



『中原の風土記』令和3年3月刊行